

気になること



# 他人同士、地域ぐるみで“家族”になる? 「多世代で住む賃貸住宅で、子育てから 介護までの悩みを解決したい」

いざ困ったとき、家族は近くに住んでいないし、親類だって頼れない——。そんな人が多い現代に、新しい“家族”的なたちを模索して今年2月に生まれたのが、さまざまな世代の他人が適度な距離感で助け合って暮らそうという、賃貸共同住宅「荻窪家族レジデンス」。このプロジェクトの代表、瑠璃川正子さんにお話を伺いました。

取材・文=北村昌陽

撮影=中川真理子

イラストレーション=内田尚子

構成=新村直子(編集部)

「荻窪家族レジデンス」は、都内の荻窪駅から徒歩7分ほどの、閑静な住宅街に建つ賃貸共同住宅。といってもその造りは、普通の賃貸マンションとはかなり異なります。3階建ての新築の建物の中に、14戸の居室のほか、入居者が自由に使える共用のラウンジや、外部の人にも開かれたイベントスペースなどを備えています。入居した住人と近所の人々が交流しながら、共に支えあって生活する場を提供して建てられました。

荻窪家族は、この住宅の入居者と地域の人、サポートするメンバーなどで作る参加型の賃貸住宅プロジェクトです。私が、両親から受け継いだ不動産(実家および隣接するアパート)を建て替える形で建築し、この春から入居者も入りました。オーナーである私は3階に、夫と愛犬1匹と共に暮らしています。

荻窪家族は、この住宅の入居者と地域の人、サポートするメンバーなどで作る参加型の賃貸住宅プロジェクトです。私が、両親から受け継いだ不動産(実家および隣接するアパート)を建て替える形で建築し、この春から入居者も入りました。オーナーである私は3階に、夫と愛犬1匹と共に暮らしています。

2階には、入居者用の広い共同ラウンジがあります。ここはガラス屋根の明るい空間で、大きな冷蔵庫もある。住んでいる人がおしゃべりや読書、食事など、いろいろなことをしていくことができる場所になります。3階には共同の浴室が2つあります。

会所などがあります。子育て支援や介護・医療に関して知る場づくり、工芸、絵画、ヨガの教室などを開くような、地域の交流スペースというイメージです。

2階には、入居者用の広い共同ラウンジがあります。ここはガラス屋根の明るい空間で、大きな冷蔵庫もある。住んでいる人がおしゃべりや読書、食事など、いろいろなことをしていくことができる場所になります。3階には共同の浴室が2つあります。

荻窪家族プロジェクト 代表  
瑠璃川正子さん

1949(昭和24)年、東京・杉並生まれ。介護支援専門員資格取得。子育てを支援するNPO法人「ちいきちいき」代表。

生活するうえではもちろん、ソーシャルな部分も大事。14戸ある居室は、1区画およそ25m<sup>2</sup>(約7・6坪)で、トータル数で割ると1戸当たり約10m<sup>2</sup>。家賃は共益費など込みで、月15万円程度です。

生活するうえではもちろん、ソーシャルな部分も大事。14戸ある居室は、1区画およそ25m<sup>2</sup>(約7・6坪)で、トータル数で割ると1戸当たり約10m<sup>2</sup>。家賃は共益費など込みで、月15万円程度です。

# 新しい形のシェアハウス 「荻窪家族」とは？

荻窪家族は、3階建ての賃貸共同住宅です。「居住者の個室」「居住者が共同で使うラウンジや浴室」「居住者以外にも開かれた地域開放共有スペース」という3種類の空間で構成されています(イラストは1階部分)。

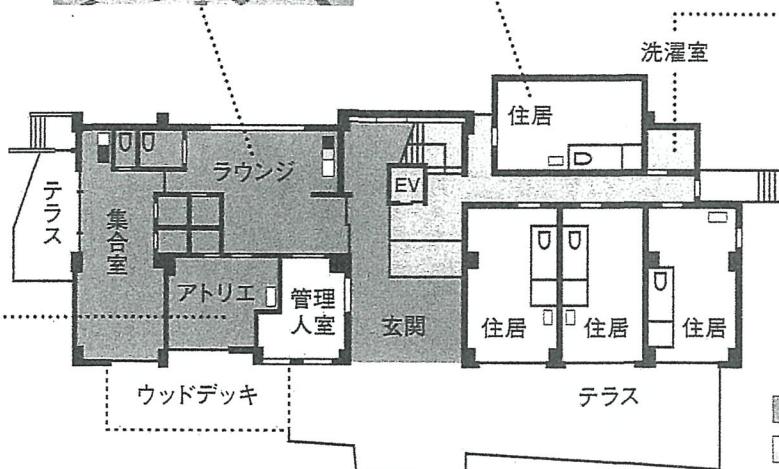
## Data

所在：東京都杉並区  
構造：RC造3階建て  
敷地面積：619.21m<sup>2</sup>  
延べ床面積：765.10m<sup>2</sup>  
賃戸数：14室(25~25.5m<sup>2</sup>)  
賃料+共益費ほか  
=12万8000円～  
15万6000円/月

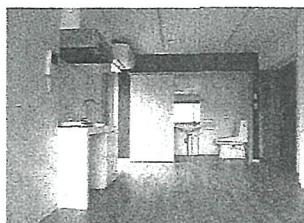
ソファーやテーブルが置かれた広いスペース。居住者も外部の人も、お茶を飲みながら楽しめます。



工作や手芸など、さまざまな創作活動ができるアトリエ。セミナーや趣味の教室の会場としても使えます。



共同の洗濯室。「コインランドリーも考えましたが、それも世知辛いと思って、自由に使えるようにしました」



居室は、1部屋ごとに内装やレイアウトが少しずつ違います。「好きなところを選んでいただけます」



■ 地域開放共有スペース  
□ 居住者共有スペース  
□ 居室、付帯設備

私がこうした形の賃貸住宅を思い立ったのは、親の介護がきっかけです。私は、4人の姉妹の末っ子として、戦後に生まれました。両親は明治生まれ。父は102歳、母は96歳で亡くなりました。ふたりとも自宅で看取りましたが、最後は私と姉、ヘルパーさんが8時間交代で待機するなど、なかなか大変な状況でした。

一方、義父母は病院で看取りました。義父は、医師に言わるままに呼吸器をつけて、口をきけない状態で亡くなつ

## 親の介護をきっかけに自分らしい生き方を考えた

私は、まだ予期せぬことがありそうで、楽しみです。

ういう意味では、これからが本番。私にも先は見えませんが、まだまだ予期せぬことがありそうで、楽しみです。

私が子どもの頃には、3世代以上が一緒に暮らす大家族が、まだ当たり前。近所付き合いも、今よりはるかに濃密でした。何でもある今と比べればいろいろ不自由もあつたことは思いますが、家族やご近所同士で、世代を超えて助け合っていたから、多くの方が年を取つても自宅で暮らすことができたのだと思います。

ですが、社会のしくみが大きく変わった現代では、そういう人のつながりが希薄です。

たのですが、果たしてあれでよかつたのかと、今でも思い返すことがあります。

義母は、介護施設に入居していました時期があり、そこでは個室に暮らし、栄養管理など

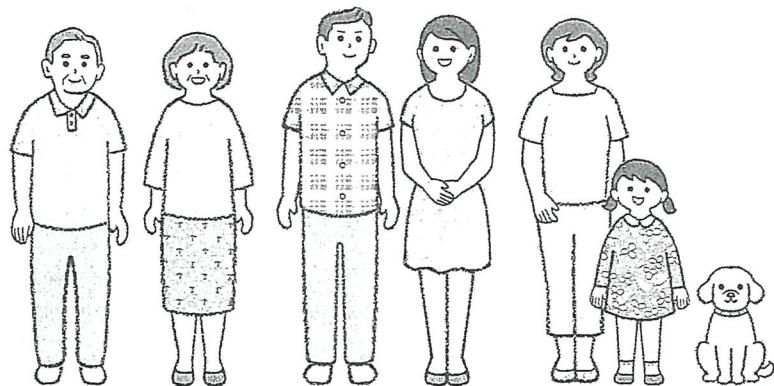
地の外へ散歩に出ることさえ許されない。窓の外を自転車で走る子どもの姿を眺めながら「ああ、みんなふうに走れたら気持ちいいだろうね」とつぶやいていた横顔が、忘れられません。

# 「荻窪家族」が目指す コンセプトはどんなもの？

多世代で住むシェアハウス



百人力サロン



- 地域交流  
(イベント、講座など)
- 介護サポート
- 子育て支援
- 安否確認

世代が一緒に住むことも少なくなっています。そういう状況で、生涯自宅に住み続けるのは容易ではありません。お金があれば、老人ホームのような施設に入れます。そうすれば介護サービスが受けられるでしょう。でも、そういう場所に住むのは高齢者ばかり。たとえ安全性は高くても、活気や刺激は少ない面も。自分らしく生きている実感が乏しいと思うのです。

## 100人の知恵が集まれば みんな「百人力」をもてる

「私自身、自分の家で最期を迎える」と話す瑞穂川さん。でも、子どもだけを頼りにするわけにもいかないし、家族や地域とのつながりが希薄になつた現代では、漠然と思つてゐるだけでは、希望どおりの最期を迎えるのも難しいでしょう。そんなところから、「荻窪家族」の構想が徐々に出てきたそうです。

親たちの介護経験を自分に重ねて、何が必要かと考えるうちに、友人や近所の人たちとつながりを深め、互いに助

け合うことが大事だと思うようになりました。家族以外にも、周囲の多くの人と支え合は関係があれば、年を取つても自宅でやつていただけるだろうと考えたのです。ここから、異なる世代が一緒に住み、交流し、共に暮らす場を作りました。幸い私には、親から譲り受けた不動産があつたので、ここに、そういうコンセプトの共同住宅を建てればいいじゃないかと。それが「荻窪家族」の始まりでした。

おもしろいもので、こういうことを考え始めると、助けてくれる人が次々と現れます（笑）。同じような問題意識をもつ方々が吸い寄せられるようになつてきました。そのひとりが、ダイヤ高齢社会研究財団で老年学を研究する澤岡詩野さん。介護や福祉の制度に詳しく、さまざまな人脈をもつ彼女が参加してくれたことで、荻窪家族プロジェクトは一気に動き始めました。

その澤岡さんが連れてきてくれたのが、イギリスで建築デザインを学んだ建築家の連

健夫さん。私の漠然とした思いを具体的な形にするため、いくつもの案を出してくれました。いろいろな知恵をもつた人が集まることで、ものごとがどんどん動き出す。私にとつてこれは、まるで「魔法のじゅうたん」のような経験でした。最初、私がひとりのときはただのじゅうたんだつたのに、ほかの人が加わると、そのたびに違う動きをするようになる。ひとりでは経験できなかつた、いろんな景色を見せてくれるのです。こんな楽しいことはないですよ。

住民が地域と支え合つて生きていこうという、「百人力サロン」のコンセプトもこんな中で生まれてきました。一人ひとりの力は小さくても、それぞれが誰かの役に立てば、結果としてみんなが100人の力をもてる。しかも、多くの力をもてる。しかし、多くの人生や価値観を体験することで、私たちの人生が何倍も豊かになる、と。

このサロンを運営するためには、住民のみなさんからは荻窪家族の会費を月1000円いたぐら形をとつています。こ

# 編集部が訪ねた日の懇親会では こんな発言が…

入居者の女性(80代)



近所に住んでいて、ここは何の場所だろうと思つて見ていきました。老後のことを考えると、地域に根ざした活動に興味があります。何かお手伝いできれば…。

今は家族がいますが、いずれひとり暮らしになつたらどうやって生きていくのかと考えたとき、こういうスタイルに興味を持ちました。今日は情報収集です。



ご近所の主婦(60代)

ここに来る前、3か所の施設に体験入居しましたが、生活に自由がなくて気に入りませんでした。ここでは温かく迎えていただき、感謝しています。



初参加の女性(60代)



## 高齢者だからといって 周囲に頼るばかりではない

出発点は親の介護でしたが、「萩窪家族」は高齢者用の住宅ではありません。単身者や子育て世代、学生など、いろいろな年齢層の人たちが住むことを想定しています。ですから行政から見ると、得体の知らないものに見えるようで、確認申請が下りるのに1か月以上もかかりました。

実際に多世代が一緒に住むようになると、高齢者は、周囲に頼らざるを得ないことが

れを原資に、この住宅の活用方法などを検討する懇親会(上参照)の費用や、介護が必要な人には介護支援を、子育て支援が必要な人には、NPOと連携して支援する仕組みを提供していく予定です。

多いかもしれません。介護について、現在、自宅で安心して過ごせるような、在宅医療・介護の専門家のネットワークによるサービスを準備中ですが、常駐の福祉スタッフを配置することは考えていません。高齢者だからといって一方的に助けてもらうだけではなく、たとえば趣味を生かしてラウンジで教室を開いたり、子育て世代をサポートしたりなど、その人それぞれに前向きな関わり方があると考えているからです。

現在入居している方、これから参加していただける方々、そしてこのプロジェクトに関心をもつていただける地域のみなさんらと一緒に、よりよい暮らしを考えつつ、「萩窪家族」を作つていただきたいと思っています。

100人が集まつて、それぞれが誰かの役に立てば、みんなが「百人力」をもてるのです。  
そんなつながりを作つていただきたいと思います。